



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	西播怪談実記と岡田光憐
Author(s)	金井 寅之助 (Kanai, Toranosuke)
<i>Citation</i>	文林 (BUNRIN), No.3 : 25-66
Issue Date	1969
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

西播怪談実記と岡田光偶

金井寅之助

一

西播怪談実記については早く水谷不倒氏が選擇古書解題(昭和十二年刊)に紹介せられるところがあり、近くは濱田啓介氏が吉文字屋との関係においてその著者春名忠成に觸れられるところがあつた(国語国文昭和四十二年十一月号)。同書は姫路の皿屋敷の巷説を巻頭に置き、近くの佐用郡揖保郡のことに係はるもの多きため、早くから関心の去らないものがあつた。はからずも四十三年夏、姫路在住の、佐用町の大庄屋でもあり本陣でもあつた岡田家の後裔である岡田護氏より古文書の解読を求められたのを機縁として、西播怪談実記とその序者岡靖軒などについて若干明らかにすることができた。

二

西播怪談実記の架蔵するものに、吉文字屋板宝曆四年刊記のもの二種と、「西國奇談」と改題する豊住幾之助板とがある。

吉文字屋板のもの二種は共に第一図の如き刊記を有し、同一板木によるもの。一は五冊本、一は四冊本(第二図)、ただ装を替へたにすぎぬ。五冊本は横十六糎縦二十二・二糎であるに對し、四冊本は横は同じく縦は二十二・七糎と若干長

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第一図 西播怪談実記五冊本刊記

い。架蔵の五冊本（第三図）は第二冊と第五冊の零本。第二冊は四冊本の巻二と同じ。第五冊は四冊本の巻四の十二丁目から始まり、不自然にも、第四冊と一篇の途中で冊を分つ。五冊本と四冊本と、刊行はづれが先か。架蔵本によつて比較すれば、板の磨滅度よりして、四冊本が後刷の如くである。

四冊本は毎巻を一冊に宛て、丁数は次の如くである。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第二図 西播怪談実記四冊本表紙

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

卷一 序一丁 目録一丁 本文十八丁半（終丁は裏見返しに貼る） 挿画半丁三箇

卷二 目録一丁 本文十九丁 挿画半丁分三箇

卷三 目録一丁 本文二十丁半（終丁は裏見返しに貼る） 挿画半丁分三箇

卷四 目録一丁 本文二十丁 挿画半丁分三箇

著者は、毎巻約二十丁宛四巻四冊にするつもりであつたであらう。中には怪談らしからぬものまで収められてをり、四巻の体裁を整へるためであつたかと思はれるからである。大阪の本屋仲間の「開板御願之扣」にも、四冊として願ひ出されてゐる。しかし書肆は商策の上から、巻四を十一丁と十丁との二冊に分ち、全部五冊として売出したものと思はれる。後

に、丁数の甚しい不均衡を氣にして、最初の予定の如く四巻四冊にしたのであらう。年代は遡るが、西鶴の男色大鑑も、初めは巻二巻七を二冊づゝに分冊、八巻十冊として発刊、のち八巻八冊に改めてゐる。

豊住板の改題本「西國奇談」（第四図）は四巻五冊。ただし冊の分け方は吉文字屋五冊本とは異なる。吉文字屋本は巻四を二冊に分けたが、西國奇談は巻三を十二丁と九丁半とに分して第三冊第四冊とし、巻四を第五冊とする。一章の終るところで分冊し、吉文字屋本の章の途中で分冊した不手際を改める。吉文字屋板五冊本が最終冊

第三図 西播怪談実記五冊本巻五表紙

第四図 西国奇談表紙

の丁数を少なくして不自然さをあらはにしたことに対して、最終冊に巻四全部を宛て、不自然さを隠さうとしたのでもある。題簽は左肩、外題は「繪入見聞西國奇談」。柱刻は、「西播怪談実記」より「西」のみを残して他を削り、第四冊は巻付丁付の「三ノ十三」とあるのを「四ノ十三」とする如く、巻付け「三」を「四」に、「四」を「五」に入木訂正してゐる。目録の内題も入木して「見聞西國奇談卷一（二・三・四・五）」とする。第四冊は分冊して目録なきゆゑ本文章題の右の枠を拡げて入木して内題「見聞西國奇談卷四」を加へる。

西国奇談で更に注意すべきは、その序文である。もとより西播怪談実記の序の板木をそのまま、使ふのであるが、文末「怪談實記と名づくるものならし」の「怪談實」を削り「西遊雜」と入木してゐる。すなはち、西国奇談と改題するまでに、「西遊雜記」と改題して刊行されたこともある筈である。森銑三氏の「隨筆辞典解題編」の春名忠成の著として掲げられる「西遊雜記」は是で

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第五図 西国奇談卷五本文終丁と刊記

あらうか。西国奇談の奥附(第五図)は裏見返しに貼られ、年記はないが明治初年の刊行と見てよいであらう。

水谷不倒氏の選擇古書解題に西播怪談実記の續篇なりと推定せられてゐるものに「世説麒麟談」(第六図)がある。同書は西播怪談実記と殆ど同装、たゞ題簽には薄海老茶色紙を用ゐる。丁数は次の如くである。

卷一 序一丁 目録一丁 本文二十丁 挿画半丁分二箇

卷二 目録一丁 本文二十丁 挿画半丁分二箇

卷三 目録一丁 本文二十二丁 挿画半丁分二箇

卷四 卷三に同じ

序・目録・本文・挿画、丁数なども西播怪談実記の体裁とよく似てゐる。版下も同筆である。たゞ漢字の使用が甚だ少ない。地方の読者を考慮して改めたのであらうか。或は怪奇の咄の量が少なかったために、仮名を多くして丁数を少しでも増さうとしたのであらうか。恐らくそのどちらでもあるであらう。内容も西播怪談実記と

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第六図 世説麒麟談の序と目録（京都大学蔵）

同じく、佐用を中心とする西播各地の怪奇なことの見聞談である。見聞の時期は同じく正徳頃から寛延にかけてである。たゞ章末に、「あんずるに」と私案を加へて、怪奇の見聞について論評する形式が前篇よりも多い。教訓を加味して、單なる奇談から脱しようとしたのである。

序者は、西播怪談実記は岡靖軒であつたが、世説麒麟談は板元吉文字屋主人鳥酔雅子、すなはち定栄の子酔雅である。その序には「予が舊識春名忠成世々西播に住して博聞篤実また世説を好むの癖ありまのあたり見る所を日々録して文匣にミつ既に半は梓に彫あきて西播怪談実記世に行る今残れるを拾ひて麒麟談と題し四方に弘る事あり」といふ。西播怪談実記巻末の出版予告「以上前編終 後編跡より出し申候」をも参照して、水谷不倒氏の推定された如く続篇と見てよささうである。しかし麒麟談の開板願は宝暦十年十月、序の年記は宝暦十一年正月。西播怪談実記刊行後六年を経過する。或は前篇出版後間

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第七図 西播怪談実記八冊本巻八表紙
(刈谷市立図書館蔵)

もなく後篇も出版され、前後の西播怪談実記を承けての統編としての新しい書名「世説麒麟談」を附けたのではないかと疑へば疑へぬでもない。国書総目録によつて西播怪談実記八冊のあることを知った時、果してと案を拍つ思ひであつた。しかし、刈谷市立図書館で、八冊本を見るに及んで、この予想は裏切られた。西播怪談実記八冊本は、その四冊本に世説麒麟談四冊を加へ、麒麟談の書名を削り、八巻八冊として板行したのに過ぎなかつた。水谷氏の推定通りだつたのである。八冊本は(第七図)、緑色表紙、題簽左肩、二重枠、外題「西播怪談実記一(一八)」、序題なく、目録題は外題と同じ。麒麟談をその後半とするに際して、巻の順序を変へ、巻四を巻七に、巻三を巻八に宛てる。巻四の最終章が、後半は怪奇の話でないゆゑ、怪奇談で終る巻三を巻八に宛てたのであらう。單に改編して板行するものであつても、書肆は細かく神経を働かせてゐるのである。

卷一には、すでに岡靖軒の序があつた。麒麟談巻一にも鳥醉雅子の「世説麒麟談序」がある。よつて後者を巻八の巻末に移し、「後敍」と入木訂正し、年記も削つた。しかし文中の書名「麒麟談」を削り忘れてゐる。

かくて西播怪談実記板行の次第を要約すると次の如くなる。

- 一 西播怪談実記 五冊本 宝暦四年刊
- 二 西播怪談実記 四冊本 刊年不明
- 三 世説麒麟談(右後編) 四冊 宝暦十一年刊

四 西播怪談実記（西播怪談実記四冊本と世説麒麟談との合編） 八冊本 刊年不明

五 西遊雜記（西播怪談実記四冊本の改題本） 四冊 刊年不明

六 繪本 西國奇談（右改題本） 五冊 明治初年刊か
見聞

三

さて西播怪談実記とは如何なる書か。岡靖軒の序文によれば、播陽佐用住の春名忠成が日頃見聞した奇怪な咄を輯録したものであるといふ。事実、卷一の巻首には、有名な播州皿屋敷の巷説を掲げ、「所は桐の馬場にて皿屋敷といひ傳へ寛延の今に至りても其亡魂来る事止ざるにや住人なく明屋敷となれり此条年数久しくいかゝなれとも皿屋敷の事必定なれば是を説として余は郷談の趣きを書傳ふものなり」といふ。人口に膾炙してゐる皿屋敷の咄を巻頭に置いたのは、やはり読者の興味をそゝるためであらう。他は、ほとんど一般には知られない佐用近辺の怪奇談が中心をなしてゐる。一例をあげよう。振仮名は筆者の取捨による。

○城の山唐猫谷にて山猫を見し事

附越部の庄といへる古跡の事

佐用郡佐用村の太工に三大夫といひしもの在其業に委して名を近郷にしられけり享保年中の夏なりしに竜野御城下の近在に恩徳寺といへる霊地あり此普請を請合て滞留す折しも三月三日休日なれば中間の太工近所の者共七八人誘合て城の山を見物せんとて出立けり是は建弘の比赤松黨暫栖籠し陳所にして今に其跡現然たり元来山嶮岨にして殊更魔所といひ傳へぬれば往人希なり嵯崎の船渡より西に当れる山則城の山なり後の方ハ岩石峨々と隣て鳥ならてハかよ

ふへくもなく物すこき所也爰に唐猫谷とて岩と岩との間谷切て數十丈諸木両方より生茂て中は見へすた、谷の面影のミ見ゆる右連中にて三大夫人に先立て彼唐猫谷の頭にいたるに猫一つ岩の上に居たり三大夫里遠き深山に猫の居る事不思議なりと見るたるに跡より来つとふ人音に谷へ入て失ぬ其容世の常にして少大く尾は長く垂たり尤瘦てハ見へしかと目の光甚強し三大夫跡よりの面々にしかくのよしを語れは是必山猫なるへしと恐あへりけりかくて荒々見物して麓に下て櫟子小竹筒杯つかふて越部の古跡に詣ふてつゝ暮方に恩徳寺に帰て住持の僧に猫の次第を語るに住持の曰昔より唐猫谷に猫居るといひ傳へぬれと常に往還する人もなく適々見物に行人ありても猫を見る人はなしされは彼谷を唐猫谷といふ事猫の居るゆへに名附しか又は古来の名にして自然と猫の住けるにや其来由をしらすとなん咄しとかや三大夫帰て予に物語の趣を書傳ふもの也爰に越部の庄は揖西郡にして則城の山の麓なり此御墓所は市の保村といへる所にして村翁語つたへしは俊成卿の墓共いひ又は阿佛の墓ともいへりしに寛延三年三月嵯崎村石井氏何某上京の折から

禁裏御築地の邊徘徊して上冷泉家の家司に近付播磨越部の者のよしを語御墓所の事を演説せしかは右の家司則中納言家へ申達しけるよしにて為村卿直に御對面有て委く御尋なされけるに御家の御記録にひしと合申に付家司安藤喜内をもて念比に御饗應なされ御香奠とも下され御染筆を下し給ふ

花の、ちミやこをすミうかれて野中の清水をすくとて

皇太后宮大夫俊成女

わすらるゝもとの心のありかほに野中のし水かけをたに見し

又安藤喜内より書記してわたさるゝハ

越部禪尼 五條三位俊成卿御女京極中納言定家卿御妹也官女ニテ八條院三條ト申出家後住越部仍申越

部之禪尼 ふせんにとらうす 御忌日 ごきにち

二月六日 件の御墓所ハ駅路よりは南西の山際にして皆崎の宿と平野村の間なり

越部の禪尼の遺跡は、藤江忠廉の「播州揖西郡龍野志」(宝暦元年)に「世に阿佛尼定家卿の子為家室の墓或は俣窩の墓と云は誤

也、阿佛尼の墓は洛陽東寺安井町人家の中に十六夜記に阿佛は鎌倉にて終ると有し、此所には所縁の人の建たるべし、俣窩墓は相国寺の塔頭に有と山城志

にもみへたり」といふ如く、諸説まちまちだつたらしい。冷泉為村によつて越部の禪尼の墓であることが確認せられたの

は、忠成のこの稿の成る直前のことだつた。岡田光佃の「播磨古跡考」(宝暦五年)にも、「越部の塚(中畧)古來說きたまら

ざる所に寛延三年午二月宿村石井三郎左衛門上京して上冷泉為村卿へ言上し委しき御筆の跡をいた、きぬ 禪尼老の後

世をのかれて住給ひし御舊跡也 為村卿御哥に あらハれてむもれす尊き御名を猶のこせ越部の蹟の舊塚 春幾世へた

てこしへのあととをくかすめる月にしたふおもかけ」と詳記する。平野庸脩の「播磨鑑」(宝暦十一年)には、為村の「越部

禪尼墓の記」はじめ多くの資料を掲げる。「増補播陽里翁説」(宝暦八年五月)は前記龍野志の引用文と同様な記事に続いて

「宝暦七年京都冷泉中納言為村卿定家卿十七代の孫播磨国石井三郎兵衛に仰付けられ尼塚に新舎を建給ふ」といふ。事は本書板

行以後に属するけれども、為村がこの遺跡に抱く関心の大きさを知らることができる。寛延三年為村によつて越部の禪尼の

墓が承認せられたことは、鄙にあつては注目すべき出来事だつたのである。

この章は、大きな山猫を見たといふだけの事、あまり怪奇談らしくもない。禪尼の遺跡については、怪奇談のついでに言及する体裁にしてゐるが、真意は、この越部の禪尼の墓の承認せられた事実をこそ著者は報道したかつたのである。

西播怪談実記八冊本の第七卷すなはち世説麒麟談卷四中的一章「瓜生村にて毒地のために三人死せし事」と同じ事実を記録した文献がある。股野玉川の「幽蘭堂雜記六」に「某僧井毒殺人説」として収載するものである。句点筆者。

播州赤穂郡瓜生村居民甚兵衛、見其家所常汲之井中有死蛇、則欲除之而入井輒死矣、其弟清右衛門聞井中呻吟聲、乃驚走而見之又將掇之、亦入井而死矣、其隣人孫六見夫兄弟墮井中不出、而倉皇悲憐又將掇之、亦入井而死矣、三尸枕籍井底闐然無音、於是合里旁午鳥集而不知如之何也、一父老曰、無他井中必有毒乎、吾聞之、南天樹葉能解毒、速投之、然後以可出死尸矣、衆人如教而三人齊入、既而皆仆矣、衆人愕然震恐而不知敢所復為也、村長某則指揮衆人令穿石闢土以破井、既而六尸皆出矣、先人三人死狀宛然、後入三人猶如有生氣、蓋以南天樹葉之力乎、便施醫藥而得復生、因問其狀、曰、初入井時忽覺腥臭撲鼻而肢體如解、既而戰慄勞倦、心頭岑々、其後手脚不能動止、蹉跌而落水底、無復所知矣、于時延享丁卯七月晦日也

論曰、古井之有毒也、我聞之尚矣、其所常汲之井而有毒也、未嘗聞之也、或人立水脈之論曰、陰陽乖戾之氣所蒸于溽暑而入水脈、以發毒于井中也、予察之似有理而未確論乎、若夫毒入水脈、則豈只發是井而已乎、合鄉之井悉可發毒也、昔者蘭陵華山有井有鳥巢、其中人不可窺之、窺者不盈一歲輒死、今之井毒殺人者夫異之矣、予謂、必也鳩毒矣、考諸書曰、鳩食蛇虺、以其毛脰飲食殺人、夫死蛇者鳩之遺餘乎、從古傳言、栽梧桐於井邊者、以鳩之所畏也、況又有鳩羽落水魚鼈死之語、夫水者積陰之氣、故發毒也尤甚矣、想夫井中有鳩羽在其中、蓋百姓踈漏而不視察之而已矣、夫井之欽閉藏也、聖賢遺教於典籍矣、今之人飲食疎飲者惑也、幸今見井毒殺人之的證、則宜栽梧桐於井邊、殖枸杞於水源、以避鳩毒而壽考、如朱陳村之父老矣、沙門某書

「井毒殺人紀井論」は紀事に簡であるが、評論に詳である。西播怪談実記は煩を厭はず事実を忠実に記録しようとする。人名や日附や事実若干の相違が認められ、いつれが正しいかは分りかねるが、記録の信頼度は、筆者の、近郷に住む肉親の記録に拠ったといふ西播怪談実記の方が高さうである。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

第八図 西播怪談実記五冊本巻五裏見返

怪奇談は咄の中でも最も人の興味をそゝるものである。記紀万葉、今昔物語・宇治拾遺集などの説話集はもとより、物語・小説・歌謡・記録類にも収録せられてゐる。近世になつて木版による印刷の発達と共に、怪奇談のみを集めて一部の書として出版されるに至る。伽婢子をはじめとする中国怪奇談集の翻案である一群や諸国咄・百物語の形を取る仮名草子風のもの盛行し、やがて西鶴の西鶴諸国はなしや、読本としては秋成の雨月物語にその文学的頂点を示す。西播怪談実記は、雨月物語成立直前の怪奇談集出版ブームの中の著作である。しかし、ともすれば怪異を誇張したり、ことさら潤色しようとする著作の中にあつて、見聞のまゝに筆録するといふ素朴さを失はない。時には、巻七「佐用常德寺蓑嶋にて蛤の虹を見し事」の網干の浜での舟遊びをするくだりなど、やゝ紀遊風の文飾を見ることはあるけれども、怪異をことさらに強調するところはない。あくまで怪奇の見聞をそのまゝ、録するといふのが一貫した態度である。

秋成は本書を読まなかつたであらうか。巻四「出合村孫次郎死し不思議の事」に、怪異に襲はれた男が長持の中に潜み、蓋の上に女房に腰掛けさせてゐながら、長持の中で叫び声をあげて怪異にとり殺される場面がある。「吉備津の釜」の正太郎が磯良の亡霊に殺される場面を思はせないでもない。

なほ五冊本西播怪談実記の第五冊の裏見返し(第八図)には定栄堂藏板目録が掲げられてゐる。その中に「西鶴

織留」と「西鶴置土産」とがある。西鶴置土産の板木は大阪の八尾甚左衛門より宝永四・五年頃京の青山為兵衛に渡ったことまでは判つてゐた。この目録によつて宝暦四年頃までには、再び大阪へ戻り吉文字屋市兵衛の有に帰してゐたことを知る。この藏書目は八冊本にもある。すれば宝暦十一年以降にもなほ吉文字屋の藏版であつたわけである。「西鶴織留」も享保十五年頃までは吉文字屋の藏版であつたことは知られてゐたが、これによつて、同じく宝暦十一年以後にも所有されてゐたことがわかる。

四

西播怪談実記の著者春名忠成は如何なる人物であらうか。前記濱田氏は坂井隆氏の紹介された後藤家の系図により、忠成は三日月町新宿の大庄屋であつたとされてゐる。しかし、巻四の卷末には「播陽佐用住、春名忠成集録」とある。三日月と佐用とは同藩ではなく約二里を隔てる。三日月住のものを佐用住とはいへないであらう。十一月初旬、岡田護氏の案内によつて、春名忠成の墓を展し、また後藤家を訪れてその系図を拝見した。墓地は春名忠成の邸（現在野村氏の住居）の背後の東北に当る小山の中腹にある。東隣の小山の頂きに吉文字屋定栄一族の墓がある。忠成の墓石は鼠色の自然石で、同じ形の妻の墓と、西に向つて村落を眺められる場所に、竝んでゐた。忠成の墓石の表には「法名釋淨忠不退位」「享保乙巳十年」「八月二日」とあり、裏には「春名文藏父」とある。

後藤家の系図は、近世の部分は殆ど一筆で書かれてゐる。忠善から尚善の子の忠安・重長・恒和までである。書かれたのは第八代の大庄屋尚善の時ではなかつたか。尚善は本郷の大庄屋船曳家から入つて春名家を嗣ぎ、後には三郷の大取締を命ぜられた。自ら中興の祖といひ、尚善の註記が系図中最も詳細である。書きつがれた系図・過去帳その他の資料によ

つて新しく書き改められたのが、この近世の部分なのである。このあとを巻末まで書きついだのは、尚善の子の忠安であり、自筆で、自分の世代にも加筆し孫の代をも明治十五年まで記載する。

後藤家の系図の忠成の部分を主として摘記すると次の如くである。句点は筆者。

忠 善

衛藤新四郎、十郎兵衛尉、

初赤松家臣、後属備前美作佐用郡大將軍權中納言秀家也、慶長五年濃州関ヶ原合戦敗北、以後飯播州佐用郡上津郷蟄居也、妻長水城主宇壁下總守祐頼長臣春名修理太夫之女也

忠 次

(一)

春名七郎兵衛、後改庄右衛門

有故以母氏姓改春名、始蒙大庄屋職、妻三ヶ月邑津田氏之女也

忠 重

大庄屋(二)

春名庄右衛門

襲職、妻三日月邑井上氏之女也

七郎兵衛 八右衛門

有故子也、分家

善右衛門

有故子也、分家

正 忠

森公御引移其繼大庄屋（三）

春名庄右衛門

妻西德久邑春名太郎太夫之女也

雪 堂

為曹洞宗僧、於伯州米子住職、老而歸于家卒、奈藏菴主是也

茂兵衛——彦四郎

有敬子也

清兵衛——重右衛門

分家佐用邑、號奈波屋

理右衛門 七太夫

親忠重讓諸隱居料、分家

亦右衛門 又多兵衛甚四郎改

後。分家

女 子

女 子 町屋邑八木氏嫁

女 子 名夏、早世

女 子 下德久邑小林氏嫁

忠 宜

大庄屋（四）

春名新四郎、亦号衛勝

元文元丙辰年七月六日卒、行年六十三、法名淨照

女子 下本郷船引氏嫁

女子 多賀邑服部氏嫁

女子 千本内海氏嫁

女子 名幸 早世

女子 佐用春名氏嫁

女子 山崎町富士田彌右卫門嫁、後又赤穂郡高田邑福本五右衛門嫁

女子 名久呂、早世

女子 名龜、早世

女子 西徳久邑春名弥三右衛門嫁

忠 成

弥十郎 大庄屋（五） 法名淨忠

享保十年乙巳八月二日卒、得年三十六歳、有兄弟都合四人（本文に収録せしゆゑ他は略す）

忠 勝 三宅勝藏

忠勝者忠成之嫡男、厭歳到京都、為仙洞御所之與力、被養于三宅氏、有病為養生師家卒、得年三十二

忠 顯 奉名文藏

廿歲大庄屋見習、出、二十四歲卒

女子 千本内海茂右衛門

女子 作州光國有木氏嫁、為縫病來卒

女子 早世

賀 忠 大庄屋(六)

奉名新四郎

忠 良 大庄屋(七)

奉名平藏、為人好兵法而達其奧也、

妻者千草邑内海松太郎之女也

女子 赤柳離渡三木平左衛門嫁

忠 友

奉名東吉名友自幼有名聞、後號天都、住于京師、以儒為業焉、其先受業於刪藩改陽先生、為人沈默而如愚、詩文集數卷存有于家、文化十二乙亥年十二月六日卒于家、行年六十

忠 直

奉名新四郎

刪藩所傳唯心流柔術者、以忠直為祖也、文化八未歲五月卒

尚善

大庄屋（八）

後藤太郎三、新四郎、尚善者船曳庄本郷人也、邑大生船曳新十郎泰尚之長男也、（中畧）文化八辛未五月忠直卒、同年七月祖父忠良又卒、忠友者以儒為業、（中畧）一族議而邀尚善令継家焉、（中畧）養忠安為子、漸長以助職、遂代受職也、（中畧）時有公命為三郷之大取締、年近耳順、（中畧）弘化四乙未之春年滿耳順、於是致仕矣、（中畧）實為吾家之中興也矣

忠安

大庄屋ヨリ家令ニ至迄役數十五役ヲ経ル（九）

後藤文太郎、後改春名文太郎、文化十二乙寅九月五日誕生（下畧）

重義

恒和

教忠

（一〇）
春名岩吉、後彦十郎、文久三年大里正、慶應元乙丑十一月十三日行年二十二歳

忠敬

（一一）
春名為次郎、後改後藤敬ト称ス、兄彦十郎以早世為嗣子、大里正、區長、節磨縣奉職、兵庫縣奉職、佐用郡長

忠善は衛藤新四郎とも十郎兵衛尉とも称し、初め赤松氏に、のち宇喜多家に属し、関ヶ原に敗北して北上津郷に蟄居したといふ。次の忠次は七郎兵衛、のち庄右衛門といひ、母の春名姓を称し、始めて大庄屋となる。以後忠敬まで十一代の
大庄屋を勤め、忠敬は初代の佐用郡長や衆議院議員にもなつてゐる。忠成には次の注記がある。

弥十郎、大庄屋、法名淨忠、実者村上源姓赤松支族三十六氏之嫡流福原後裔佐用郡平田氏智家、初祖孫左衛門正実之仲子也、以寛延三年甲午生、忠宜養之為嗣、以勝女妻之、享保十年乙巳八月二日卒得年三十六歳、有兄弟都合四人、伯者

(二字)

平田智家二世新助正寿、仲者弥十郎忠成、
者始福野村嫁田地七兵衛某、無子、後山野里村嫁長^{（一）}治理兵衛某、生一男、名千之助、早世、季千本駄嫁内海茂右衛門某

忠成実父平田智家初祖弥左衛門正実 実者西徳久村春名太郎太夫某之男、而母者佐用駄福岡本家澤田屋元祖五郎兵衛政家之三女栗女也
五郎兵衛後
称藤五郎 正実有兄弟都合二十二人、而其冠列也、平田仁家三世四郎左衛門正恒養之為子、以女妻之、

正恒男平田仁家四世四郎左衛門以長令正実分家、則是称智家也

すなはち春名忠成は、三月月村新宿の大庄屋で、俗名弥十郎、法名淨忠、享保十年に三十六歳で歿してゐる。西播怪談実記は宝暦四年の開版である。享保十年以前の著作を歿後になつて刊行したといふのであらうか。しかし同書には寛延三年の記事も見られる。更に天明六年開版許可の「諸国怪談実記二篇」には明和六年の記事もある。少なくともその頃まで生存してゐたことは確かである。すれば西播怪談実記の著者春名忠成を三月月村新宿の大庄屋の忠成に擬することはできないであらう。

しかし系図にも若干の疑問がある。忠成の生年を「寛延三年甲午」とする。歿年よりも生年が後になる奇妙な錯誤がある。が歿年は常徳寺の過去帳の二日の部に「釋淨忠 享保十乙巳年八月新宿春名弥十郎」とあり、墓碑系図とも一致して疑はしいところはない。歿年より逆算すれば元禄三年生れになる筈である。系図のこのあたりは後年にまとめて書かれたことゆゑ、誤りを生じたのであらう。

では西播怪談実記の著者「播陽佐用住春名忠成」は如何なる人物であらうか。同書卷一に

佐用郡新宿村に春名何某といへる農家あり延寶年中の事なりしに（中略）予か本家にて今に其嘶残りて

卷二に

佐用郡佐用、邑に那波屋長太郎といひしものあり正徳年中のある六月晴天なる日の申の刻斗に居宅の裏の田に（中略）是、
は、予、か、亡、父、にて若輩の比祖、父より別に店を出し、商を仕習せける時の事にて存命の内世談の次手には此噺も出ける
卷四に

其比佐用、笠屋喜右衛門といふもの（中略）右喜右衛門は予、か、町、内、にて

世説麒麟談卷二に

さよごほりさよむらにふくをか元達といふがなりやうの医師ありしがとしは元文のはじめ卯月すゑつかたのことなりし
に（中略）予、か、町、ない、にて

同卷三に

さよごほり佐用町の北かわ一町ばかりをへだて、藪あり（中略）寛保のころ、予も、その、ほとり、に、基をかこんであそび夜ふ
けてたちかへりしに

とあり、著者は佐用郡佐用村に住んでゐたのである。父是那波屋長太郎といひ、祖父より別れて店を出し商を仕習つてゐ
たといふ。本家は佐用郡新宿村の農家春名某といふ。農家で姓を持つものといへば、先づ庄屋位の家柄と見なければなら
ぬ。新宿の大庄屋春名氏が当然考へられてよい。大阪本屋仲間の「開板御願之扣」には世説麒麟談の作者を「播劔作用春
名重右衛門」（寛保以後大阪出版書籍目録に「春石平右衛門」とするは誤説）とし、諸国怪談実記の作者を「播劔作用那波屋重
右衛門」とする。両書ともに序文には作者を春名忠成とする。三つの名は同一人物のものでなければならぬ。すれば、
濱田氏も推定されてゐる如く、後藤家の系図の、忠成の曾祖父忠重の第四子清兵衛の子重右衛門がそれに当るであらう
か。その父清兵衛は系図の註記に「分家佐用邑号奈波屋」とある。前掲卷二の本文と符を合せる如くである。卷二には父

は春名長太郎といひ系圖の清兵衛と一致しないが、別称があつたと見るべきであらうか。

本家の春名弥十郎忠成は、重右衛門とはまた、いとこの關係にあるが、実は佐用村の平田智家の次男で春名家の養子となつた人である。分家の春名重右衛門とは、歿年では六十一年（かりに重右衛門の歿年を天明六年としても）、住居では二里を隔てる。たまたま名を同じくしたと考へるべきであらうか。すなはち、系圖に生年以外に誤なしとすれば、西播怪談実記の著者は、佐用村の春名重右衛門忠成であり、新宿村の大庄屋春名弥十郎忠成とは別人であつたと解すべきであらう。父長太郎は「祖父より別に店を出し商を」はじめたといふが、諸国怪談実記には「予が亡父山方の用事により（土佐の国）幡多郡坂下といへる所に暫時滞留のあいだ其辺の名所古跡を一覽し郷談をもて日記に戴侍れば」といふ。材木でも扱つてゐたのであらうか。重右衛門またそれを襲いだことであらう。

吉文字屋の鳥飼定榮を、濱田氏の説によつて春名忠重の第三子茂兵衛の子で養子になつたものとすれば、西播怪談実記の作者と板元定栄とは従兄弟の關係になる。世説麒麟談の序者にして板元である鳥飼醉雅は、定榮の長男で、宝曆八年に父のあとを嗣ぐ。

五

さて西播怪談実記の序者岡靖軒は如何なる人物であらうか。岡田護氏所藏の写本源氏物語は湖月抄全卷の忠実な写しであるが、その末には「此源氏物語一部以湖月鈔書之再三令校合附清濁句読者也 延享二年乙酉七月日岡田光佃」とあり、「靖軒」「岡田光佃」の朱印二顆を署名の左傍に捺す。同じく写本「歌新水の月」は当時の堂上の和歌を光佃の集めたものであるが、その末に「寶曆九年己卯六月 光佃」とあつて署名の左傍に「一日靖軒」「尚佐之印」の朱印二顆を捺す。両

者ともに自筆である。すなはち、西播怪談実記の序者岡靖軒は、岡は岡田の省姓であり、実名岡田光側であつた。

世説麒麟談卷四の最終章は「佐用村岡田氏家大むかでの事」として次の記事がある。岡田氏は光側のことである。句讀点筆者。

佐用こほり佐用村岡田氏は、そのかミ宇喜田^(ウキタ)秀家卿れう地るときよりいまにいたりて、かハラズ家ぎやうさうぞくして、代ミ邑里の長たり。こゝに享保元年五月のすゑつかた、しはいの百姓七八人きたりて應對のおりふし、げんくハんとしよゐんとのあいだなるつりやの屋ねにして、きぐちのかわらうごくおとするを、いぶかしくおもひて、居あハせしものどもミなく庭に出て見れば、かわら四五枚うごく。そのあいだのきぐちをまたがりしはむかでなり。首尾は見えず、胴のあいだばかり二尺ほど見えはへる。あやしく目なれぬものかなと見るうちに、屋ねのうちへいりぬ。予つねにしたしくゆきかよふ家なれば、くハしくき、侍りき。その、ちは見ゆる事なしといへり。いまの岡田氏ハこゝろざしふかくして、東涯先生の門弟となり、ことさら和歌をこのミて烏丸家の御弟子となり、光榮公薨去の後ハ有栖川親王家の御もん人となり、御月なミの御人じゆにくハへられて、月ミ御題をくだしたまはり、詠草を奉らる。予も又友として、つねにけんもんせしおもむきを、かきつたふものなり。

光側の家は佐用村にあつて宇喜多秀家の領地であつた時より代々「邑里の長」であつたといふ。佐用郡平福の田住家系譜には貞義の註に「与市郎、莊助、三郎左衛門、実者政静男、大莊屋、妻者佐用、邑大莊屋、岡田与一、右衛門、光側之女」とあり、佐用村の大庄屋だつたのである。古くは代官をも勤めたと同家にいひ傳へてゐる。佐用は、山崎の領主松平康映の弟康紀が寛永十七年所領二千石として与へられた地で、維新までその子孫が襲封する。その代官を、時には兼ねることもあつたのであらうか。光側の頃には江戸から代官が来てをり、高梨左仲太・大嶋権右衛門などの時に當る。

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

光僞は「東涯先生の門弟となり」とあるが、東涯の「初見帳」の享保五年四月十日の条には「岡田与一右衛門 播州佐用」とあり、平田三郎右衛門・福岡勘五郎をも続いて掲げ、「右三人明石氏に書状来ル」とある。佐用の三人が一緒に入門したのである。その修字のほどを示す一文が残っている。「林丘菴之記」といふ。句点は筆者。

凡人之處事也、染習目前之近倣、而於慎終追遠之事或失之、此人之通患也、余同宗光可應事接物之暇告余曰、東岡先祖累代古墳所在、今也草蓄羊々彷彿荒堤、不忍見之、爰建一草庵、使僧侶居之、而欲使晨夕之洒掃俛焉、聞之歎曰、余亦思之既有年、子志及乎此、可謂孫子之孝思、合追遠之道焉、時享保十年秋七月、營之名曰林丘庵、其室方可丈餘、而足容膝之安耳、室東南皆窓也、曉日之升、初月之生、宜望之、室北設一龕、安木佛一休於其中、地僻雖無佳景、幸託高處、而四面得眺望、南則嶺松森々、風覺山僧之睡、北則田園隴々、雪拂世俗之塵、東山高下、而幽谷遠、西邑相連、而世道近、驛路在眼下、旅客從容、民屋續岸畔、騷人吟行、所々望川流、時々聞樵歌、物候寂寥、而遊禽來往、奇木繁茂、山館之景色粗備矣、若夫得尋訪之文客、則乞和漢著述、欲貽後昆、因書其實、以為之記 岡田光僞謹書（署名の下部に「伯高氏」「光僞之印」の印記あり）

光僞は、また、烏丸光榮の弟子となり、その薨去の後には有栖川親王家の御門人となり月並の人数に加へられ月々御題を賜り詠草を奉ったといふが、職仁親王は光榮の教を受けられ、入木和歌兩道の師匠を兼ねられて、光榮薨後は御門弟二百

第九図 光僞の短冊（岡田護氏蔵）

七十余人もあつたといはれてゐる。高松宮家にある職仁親王の門人帳を橋本不美男氏に調べていたゝいたが、地下人の記載はないとのことで、入門の時期を明らかにすることはできない。寛延元年光栄の薨後間もなくのことであらうか。岡田家には職仁親王御自筆の詠歌心得ともいふべき一巻が現存する。高松宮家御所蔵の「有栖川職仁親王御秘書」と同じものであらうか。光偶自筆の詠十首和歌の詠草も残る。合点は職仁親王御自筆か光榮筆か明らかでない。

詠十首和歌

光偶^上

月多秋友

ゝあかすなを^{奥くひ}世に^ぬふること^もお^{ちり}もひ出の月のミ秋の友となれき。て

老か身に月より外の友もかなともにみしよの秋をかたらむ

月前松風

ゝわきてなを身にしむものは更る夜のミねの松かせ月にふくこゑ

すむ月の外にも友の有かほにかよふや夜半の袈風の音

月下擣衣

ゝ夜をふかミひゝくきぬたもから衣うちもねなゝて月をミよとや

よそにても友となるまで里の子は月見かてらや衣うつらむ

海邊秋月

ミすは又おもふものゝかすならぬ月はあかしの浦にすむ空

ゝ明石かたなかめしよゝの言葉もうかふ波路の秋の夜の月

湖上月明

へ鏡やまうつるもみかく影見えて月になミなきにほの海つら
しつけ うらなミ
いねかての床の山風海吹てにほてる月に雲もかゝらす

古寺残月

へをはつせやゆつきかくまにのこる夜の月そ高ねにかけしらミゆく
月もやゝすむとはかりのゑのは井やとよらの寺のあかつきの影

深山曉月

へ明る夜はミねのミねの声たえてひとりミやまに有明の月。
のこる 影
あはれさもうき世にしらぬ影をこきミやまの奥の月の明かた

野月露深

へてる月もこゝちやわきてミやき野の露のかすゝ影やとすらむ
月影のやとらさりせは白露のむすふ野原も何か色なる

同家見月

へもりあかす袖のよさむいとはしよ月になれぬる小田のかり庵
秋
よるゝは小田もる賤かいなむしろしきゑのひてや月をみるらむ

河月似水

川波のよるとも見えす秋にすむ月やこほりの下くゝるらむ

へ行川のなかれも浪のこほるかと思えてよわたる月のきやけさ
佐用姫神社の拝殿には光圓自筆の詠十首和歌の額が奉納せられてゐる。や、讀みにく、なつてゐるが次の如きものである。

佐用姫社法華詠十首和歌

岡田光圓

早春霞

いつのまに春はこゑ来て相坂の関のこなたや今朝かすむらん

山花盛

山里のものとも見えすさくら花さかりににはふ春のこすゑは

五月郭公

里なる、こゑないとひそほと、きすをのかさつきの名はたちぬとも

初秋風

櫛の戸にけさよりやかて吹そむるかせも秋とや身にはしむらん

海邊月

浦浪のよる／＼そめる月ミレはあかしハ秋の名にそありける

野外雪

ふりそむる雪をしくれは草の原かれにし野へもはなや咲らん

久戀

人しれす下にこかれて年も経ぬおもひはふしのけむりならねは

逢不遇戀

あひし夜の契りは夢となりぬとも今のうつゝのなからましかは

旅宿風

夢さへもたえたき夜の草まくらなれぬあらしの音はかりして

社頭祝

あふくそよ今もかはらぬ宮はしらふとしきたてし神のちかひを

有栖川宮御合點

寶曆九年卯正月

同社には、今一つこれと同じ形の額が懸けられ、「神社微考」の序が書かれてゐる。作者貞義は平福村の大庄屋田住三郎左衛門のことで、光側の娘婿である。筆は光側らしく、娘婿のために揮毫したと思はれる。貞義には他に「禮泉考問」の著があるといふ。

光側の紀行めいたものが岡田家に残る。その文雅の一斑を見られたい。文中の人物は、交友を知るよすがになるが、いかなる人であるか分らない。句讀点筆者。

やよひの中の九日に、ゆくりなく立出て、京にのぼるとて、此日は瘡崎にとゝまる。廿日、曾ねの松陰にやとりぬ。

廿一日須磨の浦にして、風月庵にやとりて

何となきミるめもすまの浦なれやあけほのかすむ磯の奈原

廿二日、敏馬浦にて富瀬氏のかりおとつれけるに、はやく京にのほりぬるとて宿にあらざりければ
かけてしもおもふかひなき磯の波人をミぬめのうらミてそすく

打出といふ處よりして、ひたりの方にこミちをたとり行て、廣田の社にまうてぬ
たなつものさかふるよゝの末遠くめくミひろたの神をあふかむ

昆陽の里にて、池のほとりにたゝすミて

めもはるに八重たつ霞ひまミえてつのくむあしのこやの池水

廿三日、中山寺にいたりぬ。池田といふ處よりして、瀬川郡山の驛を過るほとに、しれる人々に行あひつゝ、かれこ
れ伴ひ行、古曾部をたつねて能因法師の墓にまうてぬ。

入相の鐘にちりにしいにしへのことはの花や世ににほふらん

風流千載一詞人 山寺尋來憶隱倫 日暮鐘聲殊寂莫 殘花猶落墓間春

かゝる處にてハむかしをしたふならひなれば伴ふ人ミの中にも

言の葉の露のしるへに古つかをとふにそぬるゝ苔の衣手

花も身もふりしむかしに散ぬれとにほひはよゝにのこる春かせ

断碑苔深鎖煙霞 衣鉢徑迢日已斜 薄暮蕭條雲外寺 鐘聲因舊落山花

水無瀬にいたりぬれば雨さへふる

ふりし世のおもかけこめて山もともかすむみなせの夕くれの雨

寂範

義潮

泰乘

くミてけふ跡したハなんありて行みなせの川の清きなかれを

寂庵

けふは山崎にやとりぬ。廿四日、京に着侍りて後、三月盡にしたひこし花もひとへに散過てけふ九重に春そくれぬる

更衣に

やつれつる我旅衣そのまゝにかへぬ袂も夏は来にけり

四月四日の夜なりけり。伏見より船にのりて淀川をくだる。

鳴かハつうき身のわさを哀とハなれもきくらん夜船こく音

とま船にふしみの夢のさめゆくや難波江ちかきあかつきの鐘

十日、佳吉にまうてければ、けふなん卯の葉の御神事とて

おもふこと見をなハしてよ卯のはとるけふすゝよしの神のひろまへ

十一日、難波を出ぬ。生田の杜の青葉を見て

見るに今もみちぬ色もなつかし生田のもりのしける梢ハ

須磨の浦にて

あはれさハ所からなるすまの浦にかりねの枕夢もむすはす

秋に見むかけも立そふすまの浦やよるしらなみの月のすゝしさ

(余白半丁あり)

かへりて後に、飯馬浦富濱氏の許より文あり。

光側主とひ給ふけるに、他にありて逢さりければ、

保信

とひてさそうらミやすらん我もいさまちてむなしき人をこそおもへ

まち／＼し人ハいつしか浦の名のミぬめのよそにかへるつれなさ

此たひはさハリありとも行末のちとせを契る和歌の浦人

返し

光側

まちにきときけはなくさむ片糸のあはてかへりし心ほそさも

おもへ猶人をミぬめの磯の波かへるミきはのうらミけりとは

若の浦おなしなきさに行末をちきるはうれし千世の友鶴

おなしく、文のはしに書てをくりぬ

孝栄

はかなくも跡こそしたへ友千鳥見ぬめの浦の浪のたちゐに

契るそよときはかきはに高砂のまつをためしの言の葉の友

返し

光側

友千鳥猶こそおもへ浦波のミぬめのよそにたちかへりてハ

言の葉のめくミをつまむ幾度か生田のわかな春をかさねて

寶曆十一辛巳年「四月日」靖軒（署名の左傍に「一日靖軒」「尚佐之印」の印記あり）

光側の交友を知るべき資料は乏しい。前掲京都紀行にしても、敏馬の浦の富濱保信や孝榮、さては古曾部の能因法師の墓を訪ねて共に雅懷を述べた寂範・義潮・泰乗なども、いかなる人物なのか明らかでない。漢詩文も前掲のほかは残つて

ゐないので、その面の交友も明らかでない。石原元吉氏の御教示によれば龍野藩儒股野玉川とは若干の交渉があつたやうである。玉川の明和四年の「内省日記一」(龍野圖書館所藏)の五月に次の記事がある。句点筆者。

○九日 進 過士謙宅、俱適賓館、告官請、僕等如作州、問稻垣浅之允、遂如備前、訪湯浅新兵衛、且拝観國學、賜十

日許暇、官乃命曰從汝所欲、与喜逸龍山、俱如磐崎石工家、書柳生大夫之碑、如相公講小学

○十日 進 拜寶懂寺、拜片山墓、遂訪助大夫、國語會、如相公及夜話

○十一日 進 如士謙宅、如天野氏松尾氏、有過客、如溝江氏、告明日將発、且託僕礼式事、龍山竹里來

○十二日 進 與士謙偕発途、如乃井野舟曳永元宅、止宿、及晩雨甚

○十三日 進 午後詣高藏寺、舟曳圖書内海玄長従行、過上津訪筏氏、文長請従、是夜投佐用岡田氏而宿

○十四日 進 是日牛丸正因為郷導、向作州立石、訪海印師、宿于新免忠兵衛宅

士謙は龍野藩の儒者。稻垣浅之允は津山藩の儒者か。湯浅新兵衛は常山。龍山は藩儒藤江忠廉の養嗣子。舟曳永元は榮元の誤。榮元は三日月の藩醫、文陽の父である。榮元の弟は赤穂藩の大川氏を嗣ぎ赤松滄州と称する。文陽は圖書と称し、皆川淇國に学び、安永六年父の讓を受けて藩醫となる。筏氏は醫師原治、その子を文長といふ。「霧の夜は里近く来て泣狐」の短冊が千本の種谷家に存するといふ。青蘿も文長を訪れたと見え、青蘿句集に「佐用の久保軒に主せられて月の客となる。この里は朝毎に霧ふかくたちて、蒙朧たるけしきながら、春の梯にも似たりけり。薄雲に花の香ありけふの月」とある。内海玄長牛丸正因もともに醫師といふ。

股野玉川が國枝士謙と美作の稻垣浅之允や岡山の湯浅常山を訪れ更に備前藩の閑谷校を拝観しようといふ旅に出かける途中、光憫の家に泊つたのである。玉川もまた東涯の門に学び、光憫とは同門の誼がある筈である。玉川の「幽蘭堂詩

稿」には、その時の詩「宿岡田氏」（幽蘭堂雜著には「訪問田翁賦呈」の前書あり）を録してゐる。

烟霞深處即桃源 迢遞來敲花下門 庭裏春光長不老 吟哦依舊對琴尊

前にも岡田家で詩酒の宴を開いたことがあつたのであらう。更に一首。幽蘭堂雜著には「次牛丸正因不韻岡田氏席上」と題する。

迢々攀阪路 嶺月已朦朧 庭觀春全好 主忻老益雄 誰知一壺酒 共對百花風 年少爾應愛 莫追阮藉窮

光僞はこの時「翁」と呼ばれ「老益雄」と言はれる年配であつた。弟の忠吉よりいくつ年長であるかは分らないが、忠吉はこの時六十二歳である。玉川は時に三十八歳であつた。その翌十四日、玉川は光僞に和歌を贈られ、その句中の字を用ゐて七言絶句を報いる。

春日遊岡田氏亭主人見惠國風一章用其句中字賦謝

春風來問故人家 紅白相迎滿樹花 別有彩毫能引我 林泉深處坐烟霞

更にその翌十五日、道中において光僞の歌を漢詩に譯することもあつた。

途中吟

春山携手日 躑躅映柔薇 并採已盈掬 躊躇猶未歸 光僞歌思フトチツ、シニワラヒ折ソヘテ歸ルサヨシキ春ノ山ミチ 予譯之

玉川の漢詩に堪能であつたのに対して、光僞は和歌が得意であつたのである。

岡田家は明治期には既に家運衰頹、光僞の自筆類でさへ、上記のもののほかはあまり残つてゐない。したがつて西播怪談実記の著者春名忠成との交友については、世説麒麟談の最終章に「予つねにしたしくゆきかよふ家」であると、忠成のいふ以外には知るところはない。この最終章は、西播怪談実記の序を書いて貰つた光僞に対する挨拶と紹介を兼ねたもの

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

だつたのである。奇怪な大きさの百足の出現は甚だ好都合であつた。西播怪談実記の巻四の終り近くにも、怪奇談のついでに、越部の禪尼の遺跡について述べるところがあつたが、咄の構成は甚だよく似てゐる。

光僞の著書としては、前掲「播磨鑑」に「播州考三卷」を挙げるが、「播磨古跡考」上下二冊（第十図）のこと、思はれる。宮内廳書陵部に光僞自筆本がある。甚だ勤直な筆跡であり、有栖川宮への献上本ではなかつたであらうか。転写本は、佐用郡平福の田住孝氏（光僞の娘が田住貞義に嫁し、ほ、かにも両家に姻戚関係がある）赤穂市坂越の大避神社、龍野図書館、岩瀬文庫などにもある。

岩瀬文庫本は、書陵部本を明治二十八年村田良弼の写したものを転写したものである。播州古跡考の自序に「此國の勝地舊跡すくなきにあらす。うらむらくハ、古記の傳へらすして、あまねく人の不知をや。されは峯相記ありといへとも、委

第十図 播磨古跡考の序
（宮内庁書陵部蔵）

しく考へた、しけるものとも見えす。頃日武藤何某一書を袖にし来れり。見るに舊跡ことくく記して、くハしからざるにあらす。名つけて古跡便覽といへり。しかりといへとも佐用郡のこときは國の中の邊土にして、国人とても多くはしらざる故ならん、其所たかひぬる事のミなれば、今是をあらためうつして一書とす。なを他の郡にもたかひぬる事跡の有もやすらん。其郡くくにしてよくあらためた、す人あらは、終にハ國の好書ともなりなんかしと、こひねかふものならし」（句讀筆者）とある。武藤某の「古跡便覽」の佐用郡の部分を加筆訂正して一書を

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

成したといふ。「古跡便覧」は「播磨萬宝智恵袋」所收の「播磨古跡便覧」をいふのであらうか。たゞし同書は寛延三年の自序があり、加藤敬直の著である。上下二冊、上巻は古跡の解説、下巻は播磨の名所和歌集である。播磨古跡考は上下二冊とも古跡の解説であり、名所和歌は関聯の箇所一二首づゝ掲げる。郡の排列はもとより、その中の地名の順序など殆ど同一で、解説も甚だよく似てゐる。播磨古跡便覧に掲げる旧蹟を古跡考で省くところもあるが、甚だしく訂正増補されてゐる。光僞がこの書を見てゐることは疑へない。しかし加藤敬直を武藤某と呼ぶのはなぜであらうか。

光僞のいま一つの著述は、これも前掲の「水の月」(第十一図)である。光僞自筆の大本一冊、墨附五十九丁。題簽左肩「新水の月 全」。当時の堂上の和歌を光僞の集録したものである。その末にいふ。句讀筆者。

第十一図 水の月の表紙
(岡田護氏蔵)

かゝるかしこき世に生れて、かきりなき御めくみのいたらさるのものなく、下の下まで、花鳥をたのしみ月雪をなかめて、いつゝのたなつものともしからず、としある世のよろこひをのふることになりぬ。久堅の雲の上なる御なかめの、折にふれたるやまと歌を、あまさかるひなのすゑまで聞傳へ、おほけなくとなへ奉るは、あかりての代にもためしすくなき時世なりけらし。としくの公宴の御會始、月みの水無瀬御法楽なとは、あまねく人の聞ことなれはもらしぬ。これかれめつらしときゝしことのミ、かりこものミたりかはし

Rights were not granted to include this image in electronic media. Please refer to the printed journal.

く書うつしつ、水の月となんいはまほしく思ひ侍りぬ。

享保六年九月二十七日靈元院が紅葉狩に修学院へ行幸された時の御製を巻首に、寶曆五年頃までの法楽・追遠・賀・行幸などの御會の歌を集めてゐる。

光憫の墓(第十二図)は、佐用町の南部の旧陣屋趾の南東の小山の中腹に、北面して数箇所に分れて存する岡田家の墓地の一つにある。思ひがけずその一つには菊池大麓の先祖の墓地も含まれてゐた。同墓地の管理を依頼した、岡田与一右衛門(光忠)宛明治三十六年十二月二十日付及び数通の大麓の手紙も現存する。大麓の祖父に当るであらうか、菊池景福には「佐用里談」(文化二年十一月序)の著があり、佐用姫社に所蔵する。

第十二図 岡田光憫の墓

岡田家の系図はすでに失はれてゐる。常徳寺の過去帳(元禄十三年、岡田家の過去帳、墓石、位牌などによつてより始まる)同家の末裔岡田護氏に依つて作られた系図より本稿に必要な部分を抜き出して加筆すると次の如くなる。

岡田家の傳へにいふ。天正年中紀州入山(一説に丸山ともいふ)城主岡田左衛門尉宗定は、羽柴築前守秀吉と戦ひ、城陥り弟宗景及び家来数人と佐用に遁れる。宗景は備前下津井に至つて僧となる。宗定は与一右衛門尉尉之と改名、大銀杏樹のほとりに邸を構へて土着した。これが佐用の岡田家の元祖である。

岡田光良

光 久

良 久

良 孝

忠 次

与一右衛門尉尉之

寛文元年五月二十日卒

元禄五年十月二十二日卒

与一右衛門、伊右衛門

伊右衛門

元和二年十月三日卒

妻、浦上遠江守の孫娘

妻、平井八郎左衛門の娘

正徳元年十月二日卒

元文五年十一月十八日卒、七十二歳

妻、平福の大庄屋田住

往左衛門宗政三女

後妻、森家臣長井太夫の娘

光 備

光 尉

光 邦

光 良

大庄屋、与一右衛門、号、靖軒

尚佐

安永三年九月二十三日卒

妻、享保十三年三月十六日卒

後妻、安永四年九月二十六日卒

与一右衛門、号尚佐

与一右衛門

左衛門、慶応二年五月二日卒、六十歳

妻、寿賀、竜野藩儒股野玉川の養嗣子順軒の娘

忠 吉

広野庄右衛門勝家の養子となる

安永四年正月廿六日卒 七十歳

千 賀
平福大庄屋田住三郎左衛門貞義の妻

卒

宝暦五年七月二十二日

女 広野家に嫁す

女 岡田光可の妻

女 多可、坂越松本家に嫁す

光 忠

直 太郎

光 景

早世、股野順軒の孫藍田の子方三郎の次男

大正三年八月五日卒

光直、昭和八年四月十九日卒

護 直太郎の弟岡田悦の三男

岡田家は、明治に入ってから酒造を始めたが忽ちに失敗し、邸は人手に渡つた。邸跡は一町四方はあり、現在は教育委員会や地方事務所や佐用保健所の敷地になつてゐる。その西隣は分家の邸といはれ、現在理髪店と乾物屋となり、道路に面した部分は改造されてゐるが、内部の構造は昔のまゝの複雑な木組みを残してゐるといふ。

西播怪談実記の著者・序者・板元はいつも佐用の人、または佐用出身の人であり、ともに親しい間柄であつた。地方でも、当時の藝文の担ひ手は、このやうに、多くは、武士、代官、庄屋、本陣、神主、僧侶、醫者、儒者、富商など生活に余裕のある人たちだったのである。

岡田光僊年譜

行年不明のため生年は分らない。弟の忠吉は庄屋廣野家を嗣ぎ安永四年正月二十六日に七十歳で歿してゐる。すれば宝永三年(一七〇六)以前の生れであることは確かであり、行年は七十歳以上であつたであらう。通称与一右衛門、号は靖軒。別号尚佐は有栖川宮職仁親王よりいたゞくと、同家に傳へてゐる。

○元祿六年三月一日

代官高梨左中太保定、寛永三年通村奥書本「兼好法師家集」を写す。後年光僊この保定自筆なることを奥書す。

○正徳三年十二月二十一日

代官高梨左中太歿す。常徳寺過去帳に「同了西^{名乗保定} 正徳三癸巳天極月 中町高梨左中太死」とあり。のち高梨大明神の祠を建つ。岡田家墓地に「法名釈了西信士」の碑あり。

○享保五年四月十日

光僊、伊藤東涯の門人となる。この頃烏丸光榮にも入門するか。

○享保十年七月

一族の光可と謀りて岡田家墓地の辺に林丘庵を建て僧をして墓地を守らしむ。「林丘庵之記」あり。この頃既に家督を相續したるものの如し。

○享保十三年三月十六日

光佃の妻遊覺院釈清通大姉歿す。後妻は安永四年九月二十六日に歿す。宝樹院釈温香栄尚大姉。

○享保十五年

領主松平伊左衛門康直並びに隠居祐意君康等の許可を得て常德寺に屋敷六畝十歩田八畝十四歩を寄進し、佐用領主三代までの位牌を常德寺に安置す。

○享保十五年六月

領主松平康直より「一其方事古來る代々家相續不相替役儀神妙相勤之段令祝着候依之以後用向之儀大嶋権右衛門江無遠慮申合為之儀第一ニ可相守者也 享保十五庚戌年六月日 松伊左衛門（印） 岡田与一右衛門との」の文書を与へらる。大嶋権右衛門代官として赴任せし時のものか。

○享保十七年八月二十九日

靈元院の御葬送あり。「靈元院御葬送御行列」の記録を写す。

○元文三年一月三日

光佃の弟歿す。釈智喬。号、元泉。

○元文三年十一月十八日

光側の父忠次歿す。七十二歳。應善院釈祖遷居士。

○享保年中か

「仙洞御所御移徙御行列」の記録を写す。

○延享二年七月

源氏物語湖月抄全巻を写す。

○延享五年三月十日

烏丸光榮薨去。この頃光榮の位牌を家の佛壇に安置す。

○寛保元年八月十八日

光側の子多可歿す。坂越松本氏に嫁す。釈尼妙栄。

○寛延初年頃

有栖川宮職仁親王の御門弟となる。

○寛延二年三月

佐用郡長谷領主松平康詮、佐用姫社法樂詠十首和歌の額を佐用姫社に奉懸す。光側筆なり。

○寶暦二年三月

職仁親王の詠歌の心得一巻あり。末に「寶暦二年三月吉辰 中書王」とあり。御自筆。光側賜りたるか。

○寶暦五年三月

播磨吉跡考上下二冊を著す。自筆本宮内廳書陵部にあり。職仁親王への献上本か。

○宝暦五年七月二十二日

光憫の娘歿す。釈妙證。平福の大庄屋田住貞義の妻。

○寶暦五年十二月

玉津嶋社の社司高松采女正房隆所持の「菅家須磨卷并清氏松島記紀氏土佐日記」を写す。

○寶暦九年一月

佐用姫社に職仁親王御合點の詠十首和歌の自筆額を奉懸す。光憫の娘婿平福の大庄屋田住貞義も、同時にその著「神社微考」及びその序を額にせしものを寄進す。額は光憫揮毫す。

○寶暦九年六月

「新水の月」一冊を撰る。当時の堂上方の和歌を集めしもの。
歌

○寶暦九年七月

菊池大麓の祖先田原金太夫の墓を家の墓地に営む。碑あり。

○寶暦十一年一月

春名忠成著「世説麒麟談」刊。本文中に光憫の記事あり。

○寶暦十一年三月十九日

光憫、京都へ旅立つ。嵯崎・曾根・須磨・廣田の社・昆陽の里・中山寺・池田・古曾部・水無瀬・山崎を経て、二十四日京着。

○寶暦十一年四月四日

京を出て伏見より舟にて帰途につく。十日住吉に詣で、十一日大阪を出て生田・須磨を経て帰る。右の紀行自筆一冊あり。末に「寶曆十一辛巳年四月日靖軒」と。

○寶曆十二年五月二十九日

光佃の母歿す。美作粟井豊福氏の娘。光耀院釈栄林法尼。

○寶曆十二年八月

平野庸脩の「地播磨鑑」成る。中に光佃に関する記事あり。

○明和四年三月十三日

龍野藩儒股野玉川と国枝士謙、美作の稲垣浅之允・備前の湯浅常山・藩学閑谷校を訪ふ旅の途中光佃を尋ねて泊す。舟曳図書・内海玄長・筏文長・牛丸正因などと詩歌の宴あり。

○明和五年一月二十四日

御會始あり。その和歌を写す。

○明和五年七月五日

光佃の娘里久歿す。釈妙映。岡田甚兵衛忠寛の妻。

○明和六年

職仁親王薨去。五十七歳。

○安永三年九月二十三日

光佃歿す。大庚院梅薫釈尚佐居士。墓碑、正面「岡田光佃墓」左側「法名釈尚佐」右側「安永三甲午年九月二十三日」。

光圓の時より松江藩の本陣となつたと同家に伝へてゐるが、「寛政二庚戌年七月御役所宛」岡田与一右衛門の文書の控に、約十ヶ年の修覆料として銀五百目請取つたこと、自宅が雲州様に買上げられたので、他の大名方の御休泊はお伺ひの上のこと、してゐる、もし雲州様と同日になつた時はお差支へのないやうに自分が取はからふこと、本陣を勤めてゐるので雲州様より三人扶持を買つてゐること、などが書かれてゐる。「雲州御役所」の大きな看板も残つてゐる。

附記

資料の閲覧につき御便宜をいたしたいた各地の図書館、野間光嚴氏、木村三四智氏、橋本不義男氏、多治比郁夫氏、長友千代治氏、木村逸雄氏、石川俊雄氏、松原三郎氏、江川潔氏、田住孝氏、濱田洋氏、石原元吉氏、岡田護氏、後藤信行氏、ならびに常徳寺、法寛寺に感謝の意を表する。

「西播怪談実記」は本誌次号に翻刻する予定である。